

平成28年度「全国中学生人権作文コンテスト」岐阜県大会 最優秀賞（岐阜県人権擁護委員連合会長賞）

ありのままを尊ぶ

高山市立東山中学校三年 丸山 遼太郎

僕は生まれるまで双子だった。その「きょうだい」を、僕は兄、弟、姉、妹のどれでも呼ぶことができない。性の判別が難しい、体が発達しない「きょうだい」だった……。

母の妊娠五カ月の検診のとき、僕たちは、おなかの中で動いていた。母はそれを感じて、早く二人を産みたい気持ちになっていた。しかし、現実には、順調では無かった。診察室で産婦人科医の表情がくもり、気まずい雰囲気になった場面を母は今でも思い出す。「きょうだい」の障害が見つかった。医師は中絶ということばを避けたかったのか、英語を使って話したそう。ターミネートというらしい。胎児の障害によって、母体が危なくなるかもしれない。もう一度ゼロからやり直す道を、医師は提案してくれた。

両親は帰宅後、話し合った。父は、産まない決断もあると考え、母に伝えた。母は泣きじゃくり、受け付けなかった。両親は悩んだ末、大学病院でのセカンドオペニオンを選んだ。最終的に、リスクがあることを認識しながら、妊娠を継続させることにした。母は「ふたつの胎動を感じていたから、おろすことなんて考えられなかったよ。」と、当時のことを話してくれる。母の覚悟のお陰で、僕は「ターミネート」されず済んだ。だから、僕は、自分の存在を粗末にできない。

母の胎内で、僕は育っていった。しかし、「きょうだい」はトラブルの影響が増していき、下半身や内臓が発達しないことが、はっきりし始めた。出産予定日の三カ月前、母が体に異変を覚え、入院することになった。「きょうだい」の命が終わるときが来た。僕たちは、緊急の手術で取り出された。僕はそのまま未熟児用の保育器に入れられ、死んでしまった「きょうだい」は布に包まれ、母の病室へ行った。「きょうだい」がぎりぎりまで生きてくれたことで、今の僕の命はある。

「きょうだい」のことを、両親はR I Nと呼ぶ。「りんたろう」か「りん」と名付けたかったけれど、実際には、男の子でも女の子でもなくて、どちらにもできなかった。R I Nの遺体は、父と母に寄り添われて病室で一夜を越したあと、次の日には火葬された。R I Nは、息ひとつせず、世の中のすべてを見ることも聞くこともできなかった。

両親には、子を亡くした悲しみのほかに、もうひとつの試練が待ち受けていた。お悔やみの言葉をかける

周りの人たちが「男の子だったの、女の子だったの？」と、決まったように質問したことだ。父はとりあえず「男の子でした。」と答えていた。しかし、途中から考え直したという。そして「どちらでもありません。」と言うように切り替えたそう。父は「男女どちらでもないのがありのままの形だったのに、うそで取り繕うことは、R I Nを否定するのと同じで、悔しかったんだ。」と話す。父の考えを僕はよく理解でき、父がしたことを尊敬する。

生き延びることができた僕だが、未熟児で体が弱く誕生した僕には、悩みがあった。脚力の発達が遅かったことだ。父がよく散歩に連れていってくれたのを感じている。何でも平坦な道で、僕は転んで膝を擦りむいた。

小学校へ入り、体育で走ることがあると、遅いのが分かっているから、嫌な気分になった。低学年でサッカー少年団へ入ると、ランニングでは、最後について行くことがやっとだった。監督から足の遅さを指摘されるばかりで、僕はベンチを温め続けた。努力したけれど、簡単に解決できる問題ではなかった。精いっぱい走っているのに「おい、鈍足！」などと言われるのが、とても辛かった。そんなときはR I Nを思い「生きていられるだけで十分。」と、紛らわすことにした。投げやりな態度を、僕は許せない。まず存在の価値を自ら認めることが、大事だと思った。

中学に進むと、チームの友人たちは、優秀な選手が集まるクラブチームへ入ったが、僕には無理だった。それで、自分を生かす道を選び、部活動に入部した。父や兄が僕を連れ出し、ボールさばきの練習に付き合ってくれた。プロの試合を多く見て、戦術を覚えた。

部活動では、周りが僕を認めてくれる気持ちが伝わり、やる気が出た。三年生になると、皆が僕を主将に選んでくれた。中学校最後の夏の中体連大会で、僕は活躍の場をもらった。顧問の先生やコーチも、選手の皆も、育成会の親たちも、僕を認めているように感じた。人は認められると、思いのほか力を出せるものだ。僕たちは、試合前の予想に反して、市の大会で優勝した。優勝旗を握ったとき、歩くことも走ることもできなかったR I Nが、脳裏に浮かんだ。「お前の分まで頑張ったぞ。」と伝えた。

将来は教師になって、サッカー部の顧問になるつもりだ。僕のような鈍足の子を見捨てず、大切にしようと思う。欠点を見て、人を否定するのではなく、ありのままを尊び、生かしてやれる大人になるのが、僕の将来像だ。